慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「宣言」と「資本論」の間より
Sub Title	A historical view of the relation between "the manifesto" and "the capital"
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1983
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.76, No.3 (1983. 8) ,p.395(21)- 410(36)
JaLC DOI	10.14991/001.19830801-0021
Abstract	
Notes	特集 : カール・ マルクス : 没後101年 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19830801-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「宣言」と「資本論」の間より

寺尾　誠

1848年に公刊された共産主義者同盟の「宣言」は，ヨーロッパの支配権力によって押された,「共産主義の妖怪」という烙印を冒頭に掲げて，世界の根本的刷新を万国の労働者に呼びかけた。それから1世紀半近くの時日が過ぎ去った今日，ヨーロッパのみならず，世界の支配権力は,「共産主義の妖怪というお伽話」に相変らず怯えている。「この妖怪を駆立てるという神聖な仕事のため」の同盟も，当時より遙かに複雑である。先進資本主義国や発展途上国の支配者は勿論，あの「宣言」の思想で武装して人民革命をなしとげた，いわゆる「社会主義」国の権力もまた，妖怪追放のためなら連帯する。さらに奇怪にも,「宣言」の起草者マルクスにとり，呼びかけの対象であり,世界の根本的刷新の主体であるはずであった「万国の労働者」も，ごく少数の例外者を除けば，この連帯に多少とも参加してしまっている。こうした現状は,「共産主義の妖怪」が1世紀半の時日をこえてなおあらゆるタイプの支配者にとり，脅威であり続けていることを示していると共に，その妖怪性の内容を今一度観察するように我々を促している。「宣言」の起草者の死後100年ともなれば，なおのこと，その促しが強まって，当然だろう。

すでに1840年代の半ば，マルクス及びエンゲルスは,「ドイツ・イデオロギー」によって自己の「思想宣言」を準備しており，1848年の「宣言」は，その基本的な立場に基づく「党派宣言」であった。フランスやドイツにおける革命状勢の接近に直面して書かれた「宣言」が，現実の歴史的諸条件を熟慮したものであることは，1872年のドイツ語版序文その他において彼ら自ら確認したところである。にも拘らず「宣言」は単なる現状変革的な「党派宣言」ではなく，本来公けにすべく執筆されていた「思想宣言」,「ドイツ・イデオロギー」をふまえた世界史の巨視的展望に立ち，1848年ヨーロッパの現状へと党派的に介入する宣言であった。事実1872年のドイツ語版序文では,「最近の25年間に，状況がいかに甚だしく変ったにせよ，この『宣言』のなかで展開された一般的諸原則は，今日でも凡そ完全な正しさを保っている」（Werke, Bd. 4, S. 573.）と両者が共同で述べ，1883年のドイツ語版においてはエンゲルスが単独で次のようにいっている。「『宣言』を貫く根本思想は次の通りである：各々の歴史的時代の経済的生産と，それから必然的に生じる社会的編成とは，これらの時代の政治的並びに知的歴史にとって基礎をなすこと；従って（太古の土地の共有が崩壊して以来）全歴史は階級闘争の歴史，すなわち社会的発展の種々な段階における，搾取される階級と搾取する階級，支配される階級と支配する階級とのあいだの闘争であったということ；だがこの闘

争は，今日では，搾取され抑圧されている階級（プロレタリアート）が搾取し抑圧している階級（ブルジョアジー）から自らを解放しうるためには，同時に全社会を永久に搾取と抑圧と階級闘争とから解放せざるをえない，という段階に達している。——この根本思想はマルクス独りだけのものである——。」(Werke, Bd. 4, S. 577.) エンゲルスは，1888年英語版でも略々同じ趣旨の序文を書き，このマルクスの思想は「ダーウィンの理論が自然科学のためにその進歩を基礎づけたのと同じように，歴史科学のためにその進歩を基礎づける使命」(Werke, Bd. 4, S. 581.) をもつと，そのトーンをあげて，のべている。

マルクスが「宣言」の冒頭で自認した「共産主義」の妖怪性とは，何よりもまず，こうした世界史の巨視的展望に基づく現状の位置づけによるものといえる。それは「ドイツ・イデオロギー」に端的に示されているように，価値哲学と歴史科学を，独特の区別と統一の方法の下に，統合した立場において初めて可能であった。「人間による人間の搾取（支配）の廃止」という人間主義の徹底化・極限化は，価値の極みであり，これまでキリスト教的千年王国の幻想や人道主義的空想でしか表現されてこなかった理想を歴史的に実現するための方法的挑戦であった。マルクスは，その価値の極みを人間の歴史的実践（行為）への原認識を深める方向に利用したのである。つまり，超越的な価値を実現すべく自己を投企する方向に直接邁進する道を選ばず，理想的な価値を極みにおいて保持しつつ，それと区別する形で，人間の歴史的行為の原像を認識しつくすという方法を採った。そしてその原像に照らして，歴史の様々な時代の人間社会の諸関係にメスを入れたのである。人間の実践を時間の軸で歴史的にとらえると共に社会の軸で，類的存在と観る。さらにその両者の交叉する原点に垂直の内的自然の軸をすえて，精神と肉体の対応する人間的自然を認識した。それは精神か，肉体かという二元的二者択一を迫る従来のヨーロッパの人間認識の次元をこえる区別と統一の弁証論であった。精神と肉体は上下に対応する集合であり，その関係は不可逆ではあるが，不可分である。そのように不可同でありながら，有機的に統一しているのが，個々の人間の実践の球型の原像である。然るにそれらの諸個人が集まって，社会を構成すると，或る人々は，社会全体の実践の精神的部分を専ら担当し，他の人々は社会全体の実践の肉体（物質）的部分を専ら担当する。この瞬間から人間が人間を支配するという疎外された人間関係が現実的となり，また人間の存在もその肉体（物質）的基盤を離れて，精神の超越性においてのみ認識されることになる。それは人間の物質的活動の水準が低く，しかも，それに対応する精神的活動と物質的活動の分業が自然成長的にしか営まれない，これまでの歴史的時代の色々の社会においては止むをえない，必然の結果であった。この疎外された人間集団の関係こそ，支配する者と支配される者の，階級間の関係であり，「宣言」でいうところの階級闘争である。迫りくる革命的情勢を前にして，「党派宣言」として書かれたのであるから，ここにのべたような人間の実践についての原認識やそれに基づく垂直の分業と支配の関係認識には触れずに，いきなり，「すべてのこれまでの社会の歴史は，階級闘争の歴史である」と

「宣言」の本文は始められている。それは後にのべるマルクスらの現実政治的扇動の表現なのだが，その背後に以上のような歴史認識がある。後に「資本論」として構築された，産業資本主義の経済理論においては，この歴史認識の科学性が全面的に開示されるのである。それは普通，ヘーゲルの観念的な過程弁証法の唯物的なひっくり返しだといわれているが，人間の実践（行為）についての，一層深い原認識に基づく科学性というべきであろう。それは価値と認識を区別した上で，その区別のうちに極みにおいて統一するという独特の弁証法である。それは人間の実践に必ずみられる欲望の合価値的統御と合目的的統御の両側面についての天才的な識別であり，しかも，その識別が決していわゆる没価値的な突き放しのままにされずに，人格的な統合にまで高められる。合価値的な党派性と合目的的な科学性の見事な結合が，マルクスの「共産主義」に，あらゆる支配権力を震撼せしめる，妖怪性を付与せしめたのである。理想主義的な価値の極みが，たえず現状満足を許さず，未来志向へと人々を駆り立てながら，それが独走した場合に陥る空想的主観性が，現実解剖的な認識の極みにより制動され，実践主体の対象的活動の客観性がその分だけ保証される。その限りにおいて，従来の歴史的行為のどの型よりも，批判的な意識性が，自己についても他者についても，その相互の関係についても保持される。それはユダヤ教からキリスト教への推転のうちに発展された千年王国的終末の価値哲学の徹底的な世俗化であり，科学的な非神話化である。つまり，不断の歴史進化への内面的動機付けと，外面的な対象化の結合であり，非宗教的宗教と科学的実践論との統合である。

こうしたマルクスの思想に，弱点がないわけではない。エンゲルスが「宣言」の根本思想として要約した歴史の構造理解に示される無機的な一元論がまず指摘される。エンゲルスは「経済的生産と，それから必然的に生じる社会的編成」とが，歴史的時代の「政治的並びに知的歴史」にとっての基礎だという。1888年の英語版序文の方では「経済的生産および交換の支配的様式とそれから必然的に生じる社会的編成とは，その時代の政治的および知的な歴史がそれに基づいて構築され，それからのみ説明されうる，基礎である」(Werke, Bd. 4, S. 581.) とのべられた。そして，この命題はダーウィンの進化論に匹敵する社会科学上の発見だとされたのである。経済，とりわけ生産が歴史的社会の基礎をなし，あらゆる歴史的変化はそこからのみ説明しうるという無機的一元論の構造理解は，先にのべた歴史的実践の有機的集合論のそれと矛盾する。「ドイツ・イデオロギー」で展開された後者の立場が，「宣言」において何故前者の立場へと重心移動したのであるか？　そもそも諸個人の実践においては，球型の縦の原点軸に人間的（内的）自然があり，精神と肉体は，不可逆的の上下関係ではあるが，集合的に対応すると，認識されていた。ところが社会集団においては，生産力が一定水準に発達した段階で，精神的活動と肉体的（物質的）活動の疎外された垂直の分業と，社会的な水平の分業とが，それぞれの歴史的時代の自然生長的な分業体系を形成する。そして産業資本主義時代の飛躍的な生産力の発展は，この自然成長的な分業体系をゆるがし，精神的活動

と肉体的（物質的）活動の疎外された分業を廃絶して行く方向に，諸個人の社会的実践を目的意識的に高める。分業は自然生成的な段階から目的意識的段階に達し，さらに分業そのものの廃絶にまで到る。これは，マルクス（エンゲルス）が，「ドイツ・イデオロギー」から，「宣言」そして「資本論」と一貫して追求し続けた，社会主義，共産主義の理想であり，その理想に立った歴史的，社会的分業論であった。個人の実践に関しては妥当する，有機的な集合の構造が，社会集団の実践に関して，そのまま当てはまらないのは何故か？　それは，一方で自然成長的な分業体系という枠組しか組織しえない生産力の相対的低さであり，他方では分業の自然成長性に甘んじている諸個人の目的意識性の特殊利害拘束状態だと，マルクスは考えた。そして産業資本主義時代の生産力の飛躍が，自然成長的分業体系の土台を突き崩すとした。それは，伝統的な家族，共同体，国家の枠組は勿論，市民制社会の水平的な形式平等性と裏腹の産業資本と賃労働という生産組織内の垂直的な実質不平等性をも根底からゆさぶれるほどである。資本と労働の間の分業と支配の関係は，生産力の普遍的拡大と交通の貫通の下では，疎外された縦の分業関係の最後のものとならざるをえない。だから賃労働者階級はこの分業関係の廃絶をめざして目的意識的に社会主義の分業体系を組織すべく，世界的に連帯しなくてはならない。

生産力の発展に対する，このような楽観的期待は，「宣言」以降，今日に到る世界史の展開によって，はっきりと裏切られている。生産力の発達にも拘わらず，資本と労働の，垂直的な分業と支配の関係は存続し，マルクスの名づけた自然成長的な分業体系は一向に目的意識的な分業体系にとって代られる気配がない。マルクスは，あの諸個人の実践に関する秀抜な原認識に到達しながらも，何故，このような誤算にはまりこんでしまったのか？　ここに彼の理想主義的価値からくる，彼の社会認識の甘さがある。あるいは，それは諸個人の実践に関するマルクスの原認識にまで遡って観察される制約がある。個人の実践において垂直的ではあれ，有機的に対応している精神と肉体が，社会集団の実践において，専業化し，両者の間に分業関係が成立せざるをえないのは，諸個人の間に実に多様かつ複雑な資質の相違があることによる。勿論，マルクスもこれを認めており，従って目的意識的な社会主義の分業体系においては，「能力に応じて」受けとるという分配原則を肯定せざるをえない。だが，いずれ生産力の発達と共に，諸個人の人格的自律性は高まり，精神的活動と肉体的（物質的）活動の間の分業そのものが必要なくなると考えた。そうした方向性は，産業資本主義の時代に生産力の発達と並行して労働者の人格的発達が促されることから，打ち出され始めるのだと考えた。確かに生産力の発達が，人間関係の水平化を促進して行く一面があることは，今日の人民投票的民主主義や大衆消費社会をみれば，確認されよう。にも拘わらず，生産組織内の資本と労働の間の縦の分業と支配は形を変えて存続し，マルクスが予測したような労働者階級の自己管理から諸個人の自己統御に到るという歴史の展望は垣間みることすらできない。社会的にみられる諸個人の資質の相違が，生産力の発達と共に縮小することはあっても消滅することはないと判断せ

ざるをえない。「ドイツ・イデオロギー」の中でエンゲルスが共産主義社会のイメージを「朝には狩りを，昼には魚取りを，夕には家畜の世話をすることができるのであり，しかも決して猟師，漁夫，牧夫にならなくてよいのである」と専ら社会的分業の止揚について語ったのに対し，マルクスは「家畜の世話をし」の次に「そして食後には批判をする」と加え，「牧夫」の次に「あるいは批判家」を挿入した。(これについては，故坂間真人君の先駆的研究「F. エンゲルス，K. マルクス著，廣松渉編輯案『ドイツ・イデオロギー』」1971年改定版第2刷19頁と K. Marx und F. Engels: Die deutsche Ideologie, 1974 〈herausgegeben von W. Hiromatsu〉, S. 34. を参照されたい) このような理想の極みに人間全てが到達しうると考えたマルクスには，極度の未来志向の時間意識と個人の全面的発展に対する楽観的な社会意識があり，その結果，個人の実践の垂直的な原点軸である精神と肉体の原集合的対応と同様の関係が総社会的に実現すると構想したのである。勿論，この価値の極みを直接的な空想の世界で弄んだり，ドンキホーテ的にその実現に突進したりせず，現実を洞察し切るための認識を極めることに，たえず結びつけたところに，マルクスの思想の独自性がある。だから人間の実践の原集合構造が認識され，それに照らして歴史的社会の集団実践の分業体系が水平，垂直の立体構造をもつことが解剖されたのであった。歴史的社会の疎外された支配と被支配の階級関係の，最深の基盤が解明されたのである。だが，分業体系のこのような自然成長性，その疎外された状態が，生産力の発達と目的意識的な分業体系の再編により止揚されて行くという展望のうちに，理想の極みの実現を予想した時に，マルクスは価値と認識の区別よりも，認識を価値の側に強くひきつけたのである。最終的には諸個人の人格の自律的発達により能力格差やそれに基づく精神と肉体の活動分割が消滅して行く，というのは認識の言葉であるよりは，価値の言葉である。個人の実践において有機的に対応し協働している精神と肉体の関係と同じ状態が，総社会的に実現しうる，というのは sein の問題ではなく，sollen の問題なのだ。この価値の極みを実現するには，諸個人が自己の特殊利害に囚われている状態から脱却しなくてはならぬ。社会全体の普遍利害に立って諸個人の間の疎外された分業体系を止揚して行くべきである。そうした普遍利害の立場に否応なく立つのが，賃労働者である。何故ならば，産業資本主義の生産組織内においては，彼らは生産手段の所有から切り離され，失うべき何物もない，「無産」の階級として生存しているからである。「宣言」の最後のアッピールはいう。

「諸支配階級をして一つの共産主義革命のまえに戦慄せしめよ。プロレタリアートは，その革命において，鉄鎖以外に失うべき何物ももたない。プロレタリアートは獲得すべき世界をもつのだ。**万国のプロレタリア団結せよ！**」(Werke, Bd. 4, S. 493.)

そして，このアッピールの客観的根拠が，ブルジョア的生産力の発展なのだ。「宣言」はこう分析する。「社会が手に入れた生産諸力はもはやブルジョア的文明及びブルジョア的所有諸関係の促進のためには役立たない；反対に生産諸力は，これらブルジョア的所有諸関係にとり，余りにも巨

大になりすぎており，ブルジョア的所有諸関係によって阻止されている；そして生産諸力が，この阻止をのりこえるや否や，全ブルジョア社会を無秩序におとしいれ，ブルジョア的所有の実存を危うくする。……ブルジョアジーが封建制度を打ち倒した武器は，今やブルジョアジー自身に向けられている。」(Werke, Bd. 4, S. 468.)

こうしてみると，生産力発達の現状破壊性こそが価値の極みに強くひきつけられたマルクスにとり，その楽観的展望を裏付けてくれる認識上の保証だったことが判る。だが，それは価値と認識の区別という方法上の戒めを敢えて破った，認識上の投機的冒険であった。それは，産業資本主義やそれ以前の歴史的社会を冷静に解剖して行くために，最強力の武器となるはずであった，実践に関する，あの原集合的認識とは本来矛盾する方向への冒険であった。マルクスらを取り巻く実践的環境とそれに対する，彼らの「共産主義」的党派の立場が，この矛盾を十分解決するよりは，矛盾を内包したまま，生産力の現状破壊性に信を寄せることとなる。エンゲルスが「宣言」の根本思想としたあの生産（経済）決定論的な歴史理解が前面に出る。その責任は決してエンゲルスだけに帰せられない。マルクス自身が，「資本論」への準備的労作である1859年の「経済学批判」の「序言」において，有名な上部構造・下部構造論を展開している。

「人間は，彼らの生活の社会的生産において，一定の，必然的な，彼らの意志から独立した諸関係を，すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係を受容する。これらの生産諸関係の総体は，社会の経済的構造を，すなわち，そのうえに一つの法律的および経済的上部構築がそびえたち，それに一定の社会的意識諸形態が照応する現実的な土台を形成する。物質的生活の生産様式は，社会的・政治的・精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて，逆に，彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は，その発展のある特定の段階で，それらが既存の生産諸関係と，あるいはそれの法律的表現にすぎないところの所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は，生産諸力の発展諸形態からその桎梏に急変する。その時，一つの社会革命の時代が始まる。経済的基礎の変化と共に，巨大な全上部構築が，あるいは徐々に，あるいは急速に，変革される。」(Werke, Bd. 13, S. 8f.)

1848年を頂点とするヨーロッパの革命運動の波が引いた後，イギリス資本主義の黄金時代に象徴される1850年代がやってくる。流産する運命におかれることになるドイツ三月革命に，自らの思想的立場から党派的介入を敢えて行ない，「宣言」を公けにしたマルクスは，興隆しつつある資本主義経済という現実を直視せざるをえない。ここに「資本論」への理論確立という迂回が始まった。この迂回作業において，マルクスの生産力の現状破壊性に対する確信が，「経済学批判」の上記のような，無機的な生産（経済）一元論の歴史理解をうみだしたのであろう。勿論，「資本論」には，「ドイツ・イデオロギー」で展開された，あの立体的な分業論が，資本主義経済に即して，その骨格解剖に応用されている。社会的分業の水平的な展開によってもたらされる商品経済の全面的滲透

と，作業場内分業における指揮者としての資本家と演奏者としての賃労働者の垂直的な分業と支配の貫徹が，労働力の商品化を要めとする労働価値論の論理的展開のうちに，その複雑な絡み合いの諸関係として解明されたのである。「経済学批判」で粗描された生産（経済）一元の無機的な関係構造論に徹しているかに見えながら，「ドイツ・イデオロギー」に一つの集約をみた，実践（生活）総体の有機的な集合構造論を，資本制経済の骨格解剖に，見事に内在化せしめている。資本の実体的・機能的なとらえ方に対置して，資本の本質的・活動的な認識が提出され，所有の神話の欺瞞性が明るみに出される。「資本の生産過程」，「資本の流通過程」，「資本制生産の総生産過程」という体系的な資本の運動法則の解明は，残念ながら未完に終ったとはいえ，資本の本質を賃労働のうちに見出したという点で，古典派経済学の批判を達成したといってよい。そして，その賃労働が人間の労働力を商品化することにより，労働力の価格である賃金に対応する労働のみならず，賃金と引き換えに賃労働者が資本家に提供を義務づけられた労働全体も商品化する。労働全体のうみだす価値から労働力の価値を差し引いたものが，剰余価値とされ，資本家は工場経営の組織的営利活動を通じて，この剰余価値を利潤として獲得しようとする。資本家の営利活動と賃労働者の賃労働が，本来，伝統的な家政経営にとってはあくまで外部的であった商品経済を，近代的な営利的企業経営に内部化せしめ，ここに資本主義に特有の商品経済の長期的な循環運動の深奥の基盤が与えられた。形式的に水平な商品経済の関係が，この一点において実質的に垂直な分業と支配の関係に支えられていることが暴露された。

それでは，この実質的に不平等な分業と支配の関係はいかにして超克されるのか？「宣言」においては，生産力の発達にとり桎梏となるブルジョア的所有関係を，その所有関係から疎外されている無産のプロレタリアートの世界的連帯によって破壊するという展望が語られていた。こうした階級闘争の視点は，「資本論」では後景に退き，生産過程における実質的に垂直な資本と労働の関係が，両者の階級闘争の基盤として示されるに留まる。それは価値の立場を認識の立場によって抑制したものである。だがマルクスは，この抑制を十分に貫きえていない。マルクスは「資本論」の叙述を商品論から始めた。それは商品の使用価値と交換価値の二重性に注目し，後者の側面で労働価値を発見した当時の古典派経済学の換骨奪胎をねらったものであり，形式的に水平な商品経済が，商品の弁証法的な二重性のうちに矛盾を内在させていることを論証したものである。その起点から価値形態論と貨幣論を展開し，その上で「貨幣の資本への転化」において形式的水平性にかくされた実質的不平等性を暴くという筋道がとられる。そこで資本と賃労働の垂直的矛盾は，商品経済の水平的矛盾と絡みあって，産業資本主義の構造に歴史的な刻印を与えるというのである。それは産業循環の成立と恐慌到来の必然性として現象して行くのだが，マルクスは垂直的矛盾をはっきりと指摘しながらも，現象としては水平的矛盾の役割が大きいことを認めている。だから生産における資本家と賃労働者の分業と支配の関係からではなく，敢えて商品論から彼の弁証法的分析を始めた

のであろう。その際，商品の自然的有用性を表わす使用価値の側面には，生産力の発達，つまり対自然の技術と対社会の社会的分業が織りこまれているとみる。他方，商品の市場的等価性を表わす交換価値は，生産関係における賃労働全体の商品性が一般的抽象的労働を体現するという形で，価値として把え直される。さらに労働力の商品化を導入することにより，賃労働全体の水平的な商品性には垂直的な矛盾が内包していることが暴露される。だが，当面は生産力と生産関係が，使用価値対交換価値（価値）という水平的な相互作用を商品の中に内在化させるとされる。そこであの無機的な一元論の関係構造論が流出論的に展開されることになる。使用価値視点では，生産力の発達が考えられるが，その現状破壊性は交換価値・価値視点において現われる。市場経済的変動をみせる交換価値が，恐慌をどん底とする景気循環の波をこうむるのは，私有財産の原則に立つ資本のブルジョア的所有関係の下では必然的な無政府的競争の結果である。だが，交換価値の本質には労働の商品性が価値として体現しており，それは商品経済の下での，労働の社会的性格の表現である。恐慌の折には，交換価値（価格）の急落により，価値の破壊が起ると，マルクスはいうが，それはまさに労働の社会的性格とブルジョア的所有関係の矛盾のためである。労働時間の絶対的延長による資本家の営利活動が当時，優勢であったという時代の制約性が考慮されるべきだとはいえ，マルクスが，労働時間を単位とする価値の実体的大いさを論証しようとしたのは，こうした生産関係のつかみ方があったためである。生産力の発達に対し，桎梏となる生産関係は，交換価値の面での市場経済の周期的恐慌のうちに，その歴史的限界を表わすものの，賃労働の社会性の市場経済的表現である価値の破壊が使用価値の破壊と結びつき，商品経済の計画的社会主義経済への革命的推転を準備する。マルクスが価値の実体的大いさに固執したのは，この考えのためであろう。つまり生産力の現状破壊性により，生産関係も変更を余儀なくされるという，あの一元論的な歴史理解が，資本主義の経済分析の起点に入りこみ，マルクスの価値論を認識の仮説としてよりも，価値の極みへ接近する理念として，行き過ぎた観念化の所産としてしまったのだ。そこに絶対理念の自己実現の過程としての世界史というヘーゲルの歴史貫通的発展段階を批判していたにも拘わらず，マルクス自身もその唯物論的顚倒とみなされうる生産力の自己実現の過程としての世界史という単純な歴史貫通的把握が明白に読みとれる。ヘーゲルが，精神と肉体（物質）の垂直的関係を，絶対観念論的な意味での不可逆性でとらえたのに対し，従来の機械的（絶対）唯物論のように，それをひっくり返して肉体（物質）の絶対的優位性を説くことに，フォイエルバッハは満足しなかった。彼は，人間的自然を精神＝肉体（物質），頭脳＝心臓という水平の位相でとらえ，徹底的に個体の立場から西洋キリスト教文明の精神専制主義に止めをさそうとした。マルクスは，その彼に導かれて，人間的（内的）自然の球型の原実践像に到達したのであった。時間と社会の軸と共に，内的自然の垂直軸が考えられ，全体は球型の原集合構造である。ヘーゲルのように絶対観念論の意味で，精神の絶対的優位性が超越的に考えられてはいない。それはあくまで人間的自然における意識性という意味で

の，集合的な対応の上位に位置するものである。人間的自然を中心軸として確認する点で，フォイエルバッハに学びながら，その極限の水平化の把握に対し，人間的自然の実践の意識性に注目し，精神と肉体を上下に対応する垂直の軸でとらえたのであった。それにより，フォイエルバッハにおいては外的自然との調和においてとらえられていた時間と社会に関しても，より明確な認識が可能となった。ここに社会認識の前提としての，諸個人の行為の原集合構造が与えられたのであった。だがマルクスは，すでにみたように，この原集合構造の認識を社会認識にだけではなく，社会革命へとつなげた。未来において諸個人の人格の全面的発展により，必ず諸個人の原集合構造がそのまま社会総体の行動関係構造となる日がくると楽観することによって。こうした極限の未来志向の観念的無政府主義の世界史的実現は，実現可能な近未来の唯物的社会主義への現実的展望によって保証される。生産力の現状破壊性と商品経済の実体的な価値法則の貫徹が，その展望実現の客観的条件をととのえてくれる。かくてフォイエルバッハを通過して折角獲得された，人間的自然の球型の原実践像にも拘わらず，観念的精神優位の志向性と唯物的肉体（物質）優位の志向性がマルクスの内部で分裂し，「経済学批判」から「資本論」という資本制社会の解析作業の過程で，後者への偏りが増していったのである。このために，「資本論」は，一部に創造的かつ批判的な読者をうみだしたものの，大半は訓詁的かつ教義的な読者を大量に生産してしまう。20世紀において，世界的大恐慌や二度にわたる世界帝国主義戦争が起ったのに，西側の資本主義諸国は，「宣言」の予想した方向に歩みだしていない。万国のプロレタリアートも，世界的交通の飛躍的増大にも拘わらず，連帯していない。

「宣言」が自認した共産主義の妖怪性は，西欧の資本主義諸国においては，マルクス達が予想した程には，発揮されなかった。だが19世紀後半に国際関係がめまぐるしく変化する中で，マルクス達によっても注目され始めていたロシアが，20世紀にマルクスの思想を武器に人民革命に成功し，共産主義の妖怪性は，全く異なる脈絡の下で，新たな威力を提示したのである。1882年の「宣言」のロシア語版序文において，マルクスとエンゲルスは，アメリカとロシアを新たに注目に価する国として指摘している。ロシアに関しては次のようにいう。

「『共産党宣言』の課題は，今日のブルジョア的所有の不可避的な崩壊が迫りつつあることを宣言することであった。しかしロシアでは，発展しつつある資本主義的秩序や，やっと形成されはじめたブルジョア的所有とならんで，土地の大半が農民の共有にある。そこで問いが生じる：ロシアのオプシチナ（農村共同体）は，すでに非常に分解しているとはいえ，土地の原始的共有の一形態であるが，土地所有のより高度な共産主義的形態に直接に移行しうるであろうか？　あるいは逆に，それはまえもって，西ヨーロッパの歴史的発展によりおこなわれたのと同じ崩壊過程を通過しなければならぬのだろうか？

これにたいする今日可能な唯一の解答は次の通りである：もしロシア革命が西ヨーロッパのプロ

レタリア革命に対する烽火であって，その結果両者が相互に補いあうのであれば，今日のロシアの土地共有は共産主義的共有の出発点として役立つであろう。」(Werke, Bd. 4, S. 576.)

元来1848年の「宣言」においては，ドイツのブルジョア革命に焦点がしぼられ，これを突破口に全ヨーロッパのプロレタリアート同時革命が展望されていた。それは，価値の極みを遙かに望みつつ，当面する歴史的現実を，その方向性に過激な仕方でひきつける，マルクス一流の，現実政治への革命的介入であった。

「共産主義は，その主な注意をドイツにむける。ドイツは，ブルジョア革命の前夜にあるからであり，またドイツは，17世紀のイギリスと18世紀のフランスに比べて，ヨーロッパ文明一般の一層進んだ諸条件の下で，またずっと進歩したプロレタリアートを以てこの変革を行なうからであり，それ故にドイツのブルジョア革命はプロレタリア革命の直接の前奏曲たりうるほかないからである。

一言でいえば，共産主義者は，どこにおいても，現存する社会的並びに政治的状態に対するすべての革命運動を支持する。」(Werke, Bd. 4, S. 493.)

現実政治の流れの中で，革命的変革の自然成長的な潮流を見分け，これに目的意識性を注入し，反革命勢力を打倒して行く，「宣言」の党派的介入の運動原理は，先にのべた価値と認識の区別と統一の方法と関係があるものの，それとは別の実践原則である。前者においては，認識者の立場からの，主観的価値の方法的抑制が，問題であり，認識者の主観性にも拘わらず社会認識の客観性がめざされたのである。後者においては，実践（運動）者の立場からの，主観的価値の社会的実現が問題であり，実践者の主観が意志的な働きかけを通じて，社会という客観的対象と多少なりとも，合一化することが，めざされるのであった。勿論，前者が，諸個人の実践（行為）の原集合構造の認識にまで深化し，認識そのものを，その実践に本来内包されていたものと理解するところに成り立ち，後者が，諸個人の実践（行為）の原集合的な意識性，批判性を深く認識した上で，無自覚で自然成長的な現実の社会的実践を目的意識化することに特徴をもつ限りにおいて，両者は深い原位相において統合的にとらえられていたと言いえよう。だが，歴史の現実においては，両者はそれぞれの独自性を主張する。認識者マルクスと実践（運動）者マルクスが，いたわけである。「宣言」を起草したのは後者であった。すでにみた通り，そこに前者も姿をみせてはいるが，それはあくまで後者の立場から利用しうる認識が動員されたのであり，しかもあらゆる可能な同盟勢力を計算に入れた，党派的介入が問題であったのだ。そして，このような実践（運動）者としての観点からすれば，現実に刻々と変化して行く日常世界における権力と大衆の階級的相互関係の只中にあって，実践（運動）の内部から生成してくる生まの認識が重要不可欠である。「宣言」が，ドイツをブルジョア革命前夜と判断したのも，三月革命以前の階級状況の只中でうまれた，マルクス・エンゲルスの実践（運動）者としての生まの認識によるものであったろう。こうした実践認識は，必ずしも理性的で，分析的なものとは限らない。むしろ，感性的であり直観的で，総合的である。しかも「宣

言」のドイツに関する状況判断のように，三月革命以降の状況推移からみて，適確だとは言い難い場合もある。マルクス，エンゲルスは，三月革命以降も，ブルジョア革命の到来を期待して運動の戦略をたてていったのであるが，ドイツの歪んだ近代化は，ブルジョア革命を経験しないままに進行していったのである。(「宣言」の) 1872年のドイツ語版への序文において，彼らも現実の状況変化に言及している。

「最近の25年間に，状況がいかに著しく変ったにせよ，この宣言の中で展開されている一般的諸原則は，今日でも凡そ完全な正しさをなお保っている。個々の点は，ここかしこで，改善されねばならないだろう。これらの諸原則の実践的応用は，宣言そのものがはっきりいっているように，どこでも，またいかなるときでも，歴史的に現存する諸事情に依存するであろう。だから第二章の終りで提案されている革命的諸方策には，特別の重みが決しておかれていない。この部分を今日書けば，多くの点で違った風に書かれるであろう。最近25年間における大工業の途方もない発展や，それと共に前進する労働者階級の党組織や，最初は二月革命の，さらにすすんではプロレタリアートが初めて二か月間政治的権力をとったパリ・コムミューンの，実践的諸経験にてらしてみると，この宣言は，今日所々が時代遅れとなっている。ことにコムミューンは，『労働者階級はできあいの国家機構をただ掌握して，それを自己自身の目的のために，動かすことはできない』(「フランスにおける内乱，国際労働者協会総評議会のよびかけをみよ。……) ということを証明した。」(Werke, Bd. 4, S. 573f.)

マルクス達は「ドイツ・イデオロギー」及び「宣言」で到達した共産主義世界革命の巨視的展望が，西ヨーロッパの資本主義諸国のプロレタリアートの連帯によって実現すると，確信していた。また，そのための客観的条件としては，生産力の巨大な発展と，市場経済やその前提であるブルジョア的私有制との間に生じる矛盾が期待されていた。だからこそ，1864年には第一インターナショナルを組織したのであった。しかし，その国際的な運動の経験は，マルクス達の理論的な認識に基づく展望と微妙な不協和音をひびかせる，現実政治の生まの認識を余儀なく，うみだして行く。1860年代の後半には，第一インターナショナル内部の論争を通じて，アイルランドやポーランドのように，西ヨーロッパの辺境地帯の被抑圧民族の解放独立運動に対する，積極的評価が，マルクス達によって，表明されて行く。

「ながいあいだ，僕は，イギリスの労働者階級が政権を掌握することによってアイルランドの制度を打ち倒すことが可能であると信じていた。『ニューヨーク・トリビューン』紙の中で，僕はいつもこの見解を主張してきた。ところが一層深く研究した結果，今では僕はその逆のことを確信するようになったのだ。イギリスの労働者階級は彼らがアイルランドを放棄しないうちは，**何一つなしとげはしない**であろう。てこ入れはアイルランドでせねばならないのだ。その故にアイルランド問題は，社会運動全般にとって実に重要なものとなる」(1869年12月10日付，エンゲルスへの手紙 Werke, Bd. 32, S. 414f.)

さらに，1870年代の，ロシアの革命家達との文通によって，ロシアにおける特殊な農村共同体を直接の基盤とした社会主義革命の可能性が，確信されるようになり，1881年の「ヴェ・イ・ザスリーチへの手紙」及び1882年のロシア語版「宣言」への序文に，はっきりとその旨が公けにされたのであった。これらの認識の変化は，現実政治の階級状況における，革命運動の只中から生成してきた生まの認識の追加によるものである。勿論，マルクスのことだから，こうした生まの認識が放置されたわけではなく，むしろ彼等の世界革命という巨視的展望の中に位置づける努力がなされたのであった。さらに，共同体や農業・土地問題について，考究が深められ，彼等の世界史理解の地平を広げて行くことにもなった。ここに彼等の党派的実践が，認識者としての作業に深い位相でつながっていたことが見出されよう。認識を，原集合的な実践の構造の中に位置づける，彼等の哲学が，それを可能にしたのである。

だが，すでにみたような，彼等の社会認識や経済分析が陥っていった，無機的な生産一元的な歴史理解は，結局，これらの実践的経験からうまれた，生まの認識ないしは，その世界史の構造理解への組みいれを，自らの理論的認識の心臓部において問題とすることを妨げてしまった。実践（運動）者と認識者の認識の間に生じた，微妙な不協和音は，周辺革命を西ヨーロッパの世界革命にリンクさせるといった，折中的な解決のうちに，かき消されてしまった。だが，20世紀初頭の世界的激動は，再び巨大な不協和音をとどろかせ，実践者の生まの認識に不気味な軍配をあげたのである。その結果，党派的実践が，客観的な社会認識に対し決定的に優位に立つことになる。マルクスの思想が，この大逆転を経験したのは，彼が晩年に注目していた西ヨーロッパの東方の辺境，ロシアにおいてであった。

農奴制と集権的専制（ツァーリズム）の堅固な結合が，西ヨーロッパの近代化のあおりを食って，ゆるみ始めたものの，農奴制の土台をなす農村共同体や集権的専制の下で極めて未成熟であった市民社会は，ロシアの近代化の見通しを暗いものとした。ツァーリズムによる農奴解放は，商品経済を発達させたものの，従来の農奴制と集権的専制の結合は，より緩やかな形で再生し，その下での，国家主導の資本の本源的蓄積過程が進行した。その過程において，ミールあるいはオプシチナとよばれる農村共同体が西ヨーロッパのように，資本主義によって一旦破壊され，その上で社会主義へ移行するというような，展望に対し，むしろ，その農村共同体をロシア社会主義の基礎細胞としてとらえかえし，集権的専制をテロルを含む暴力をもって顛覆して行くべきだという展望が，1870年代には革命家の間で有力であった。これが人民の友派，つまりナロードニキの運動であり，例のヴェ・イ・ザスリーチも，それに属する女流革命家であった。マルクスが彼等の展望に，一定の留保をつけながら支持を与えたことは，すでに紹介した通りである。

だが，ロシアにおける革命運動は，マルクスの死後，別の方向へと推移して行く。それは，集権的専制により国家的な産業革命が遂行され，その圧力の下に農村共同体も分解して行かざるをえな

いという歴史的現実の変化を反映したものである。かくて1880年代にナロードニキ派は凋落し，代って，プレハーノフやレーニンなど，マルクスの思想や理論を受容する党派が革命運動の主役として登場した。特にレーニンは，「人民の友とは何ぞや」，「いわゆる市場問題について」，「ロシアにおける資本主義」など，立て続けにナロードニキの社会主義直接移行論を批判し，ロシアにおいても，資本主義が発達し，それをふまえて，初めて人民大衆による社会主義革命が展望できると主張したのであった。だから，西ヨーロッパより著しく遅れたロシアにおいては，すでにツァーリズムを倒すブルジョア革命を成功させ，それによって資本主義が或る程度発達した上で，社会主義革命が起るという二段階革命の戦略をレーニンは打ち出したのである。その際，彼は，マルクスが，すでに資本主義発達の二つの道を認めていたのに倣い，資本主義発達のアメリカ型（下からの，自営農民を基盤とした資本主義）とプロシア型（上からの，国家主導の資本主義）といった複数の可能性を考えていた。だが，基本的には，資本主義から社会主義へという，体制移行の法則を前提に戦略をたてていたのである。その意味では，マルクスにおいてみられた，あの生産力の現状破壊性と市場経済と私有制の間の矛盾を，社会主義革命成立の客観的条件とする，無機的な生産一元論の歴史理解に，レーニンも囚われていたのである。20世紀初頭の帝国主義列強の利害が激突し，第一次世界大戦が勃発して行く中で，彼が分析した「帝国主義論」にしても，そうした歴史理解に基づくものであった。当時の歴史的現実をふまえた，多くの独創性がみられるにも拘わらず，生産力の巨大な発展とブルジョア的国家秩序の矛盾，ブルジョア的国家同士の地球分割といったとらえ方は，西ヨーロッパ，それにアメリカや日本の資本主義列強の資本主義的な分業と支配のシステムの生命力を精確に認識するものではなかった。だが，最も遅れて資本主義的近代化にのりだした，ロシアにおける現実的な階級状況は，レーニンの，これらの理論的な認識をはるかにのりこえて行く。ロシアでは，まずブルジョア革命を，そして国際的には帝国主義戦争を内乱へ転化させ，マルクスが展望した西ヨーロッパにおけるプロレタリア同時革命を実現して行くというのが，認識者レーニンの実践（運動）者レーニンに対する指示であった。ところが，大戦末におけるロシア国内の階級状況は，伝統的なツアーリズムの上からのブルジョア化が完全に破産しつつあることを証明して行く。そして，高揚する都市プロレタリアートや貧農達の自然成長的な運動は，古い家産制の統治と支配に代り，全く新しい党派制の統治と支配を求めるようになる。認識者レーニンの判断からすれば，考えられない意志的決断が下される。つまりレーニンは，二段階の革命戦略を放棄し，「すべての権力をソヴィエトへ」という権力の即時掌握を，自己の党派に指示し，大衆運動に応えたのである。ロシアの大衆運動の経験の中から生じた，生まの認識が，マルクスの理論的な世界史の展望を，修正してしまったのである。しかも，革命達成の当初，レーニンやボルシェビキの指導者達は，なお，マルクスの巨視的展望にこだわり，西ヨーロッパにおけるプロレタリアの同時革命が成立することに期待をかけていた。「宣言」のスローガンが高らかに呼びかけられた。西ヨーロッパ，とりわけドイ

ツの革命を成功させるために全力が傾けられた。しかし歴史的現実は，冷酷にも，革命がロシア一国のものであったことを示したのである。

こうしてレーニンは，マルクスにおいてなお折中的な解決で観念的に回避しえた，共産主義的な価値の極みとの緊張関係のうちに構築された，資本主義から社会主義への移行の必然性の理論的認識と，先進資本主義国においてではなく，むしろその発達系列に追いつきえなかった国々において共産主義運動が，一定の効果を発揮しうるという世界史の現実，その両者の不協和音を，後者を確認することによって，解決し難い矛盾として爆発させたのであった。集権的専制の伝統が人民革命により過激に否定された後に，要求されたのは，より集権的な人民独裁国家であった。ナロードニキの主張のように，伝統的な農村共同体を基盤にしたものではないが，伝統的な集権的専制の換骨奪胎による国家資本主義が，ロシア近代化の筋道であった。共産主義者は，巨視的な理想主義的展望により，ロシアの歴史的現実の革命的顚倒にあたり未曾有の指導性を発揮したのであるが，それはロシア人民の現実的な近代化の要求のため，自らの理想主義を犠牲にすることを意味した。

1920年代の国際的孤立の下で，ソ連の指導者に次第と明らかとなったのは，マルクスが予想した西ヨーロッパの世界的社会主義革命の一環としてではなく，ロシアだけで，つまり「一国社会主義」の路線で窮境を突破しなければならないということであった。このことは，革命運動の動機づけが，マルクスの価値の極みとしての共産主義への熱情的展望であった以上，当然に激しい論争をまき起した。だが，そもそもロシア革命を成功に導いた人民大衆の自然成長的な反体制の怒りは，そのような価値の極みを求めたものではなかった。それは，余りにも時代遅れの集権的専制による寄生的で半封建的・軍事的な資本主義化に対する大衆的抗議であり，共産主義者への支持は，彼等が，この大衆の自然成長的な近代化の革命的顚倒への要求を理解し，その先頭に立つ限りのものであった。レーニンはそうした大衆の要求を直観し，建前としての二段階革命の戦略を放棄したのであったが，さらにその後継者の座におさまったスターリンは，もっと冷静に計算し，重工業優先の「社会主義的」原蓄政策によって，大衆の自然成長的要求を，人民（プロレタリアート）独裁という，新たな大衆社会的状況の下での集権的専制の統治と支配の成立基盤に吸収した。それは，人民革命の正当性を，革命政府の正当性へとすりかえ，その新たな一党独裁の集権的専制が，ロシア民族総体の意志決定の主体となることを意味した。それは，またマルクスの思想と理論の徹底的な目的的変容でもあった。マルクスにおいては，実践（行為）の原集合構造を認識し，それに照らして歴史的社会の分業と支配の，疎外されたシステムが理解されていた。社会認識の，この正しい方向性を妨げたのは，彼の理想の極みである共産主義への楽観が，諸個人の実践（行為）においては有機的に統合されている精神と肉体の垂直的統合が，社会総体，その活動全体の関係構造においても，実現すると，マルクスに確信させたためであった。その確信を合目的的活動の客観的側面で裏づけるものとして，生産力の現状破壊性とブルジョア的所有秩序の矛盾が指摘された。マルクスにおい

ては，一方に，合価値的活動及びそれと結びついた合目的的活動における共産主義的実践のたえまない持続（永久革命）が前提されていたから，決して単純な，無機的生産一元論の歴史理解ではなかった。だが，諸個人の実践（行為）の原認識と社会総体の実践（行為）の原認識を，究極において一致させる，彼の原理想が，無機的な生産一元論と有機的な主体性論の分解を必然化した。そして今，西ヨーロッパの辺境ロシア一国において，後進国近代化の拠点として革命政府が出来上る。レーニンからスターリンへという自称マルクス正統派は，自らが国家最高の意志決定機関を独占することにより，無機的な生産一元論に偏った形で，マルクスの思想と理論を改変する。そして本質においては国家資本主義のための人民革命でありながら，その人民革命という衣装とその指導理念としてのマルクス主義という仮面を，全世界にひけらかし，この改変マルクス主義を唯一正統なイデオロギーとして宣伝したのである。それが後進国近代化の人民革命版である限りにおいて，それは，欧米日の先進資本主義（帝国主義）国の世界支配をゆるがすものとして，新たな妖怪性を発揮してきたし，現に発揮している。だが，それはマルクスの展望した万国のプロレタリアート，そして人類の解放をもたらすものではない。

他方，無機的な生産一元論と同次元での対立物である有機的な主体性論は，ソ連においては，スターリン主義に対するトロツキー主義として歴史の舞台に登場した。だが，それはマルクス自身の思想と理論を根本から検討し直すという作業に立ち向うことなく，ロシア革命と革命政府の急速な変質に直面し，これに対抗するという形で，形成された潮流であった。それは，ソ連社会への批判的分析，アジア的生産様式への自覚的な再認識などの創造的活動を展開し，絶対的少数者という非運をものともせず党派的に介入してきた。ソ連をはじめとする，改変マルクス主義の公認理論からすれば，それはマルクスとは縁のない，トロツキーの思想にすぎぬという。だが，彼らの永久革命の主張には，かつてマルクスが「宣言」で自認した価値の極みを展望し続けるという意味での共産主義の妖怪性の片鱗を認めないわけには行かない。なお今日，ソ連圏における反体制運動が，こうしたトロツキー主義やマルクス主義の枠をこえていることは周知の事実である。

さて，最後にマルクス死後の西ヨーロッパ資本主義（アメリカや日本も含む広義のそれ）に眼を転じよう。マルクスの巨視的展望は見事にはずれてしまったことは確かである。二度の世界大戦とその間に暴れ狂った大恐慌は，彼の展望に軍配をあげるかにみえた。それが，そうはならずに終ったのは何故か？　第一に，マルクスが期待した万国のプロレタリアートの連帯が成立しなかった。生産力の現状破壊性は国境をこえて世界的・普遍的な交通を必然化し，ブルジョア的所有の秩序は世界的にゆさぶられ，失うべき何物もないプロレタリアートの世界的連帯のうちに，社会主義世界革命への怒濤の進撃が始まると，マルクスは期待していた。ところが，個別資本主義国のプロレタリアートは，国民国家という枠組に固執する点において，それぞれの国のブルジョアジーと利害を一にし，関心を共にしたし，現にしている。敵対しながらも，利害の一致をみた彼我の階級は，20世紀

の複雑な国際環境の下で，あるいはファシズムに，あるいはデモクラシーに加担して，激しく戦い合った。そこでの争点は，世界的なプロレタリアート対ブルジョアジーの階級闘争ではなかった。国民国家の帰趨が，プロレタリアートにとっても，死活の問題であったのだ。このことと密接に関連し，より本質的なこととして，プロレタリアートの小ブルジョア化がある。マルクスが眼の辺りにしていたプロレタリアートは，資本の原始蓄積の過程で，無産化しつつあったのも事実である。特に産業革命の遅れたドイツではそうであった。だが資本主義の再生産機構が整えられて行くと，プロレタリアートは労働力の販売者であると同時に，市場における消費物資の購買者であって，ブルジョアジーにとって単なる搾取の対象ではない，商品経済の積極的な構成要素である。このことは，資本主義の産業循環が，生産力の巨大な発展の下で，古典的な自動回復作用を失った20世紀前半の経験から，ブルジョアジーがひきだした最大の教訓であった。それまでの，労働力人口に対する個別資本のドラスティックな行動に代り，総資本の立場から労働力商品の価格（賃金）に一定の下方硬直性を認める政策が採用されるようになる。それは，分業と支配のブルジョア的秩序の再編を意味し，賃金労働者が無産のプロレタリアートではなく，有産の小ブルジョアとなることを意味した。この転換は20世紀前半に頂点をおくとはいえ，その前後にわたる長い複雑な過程において，行なわれた。それは，また労働組合運動や労働者政党の変質の過程でもあった。大衆運動の自然成長性は，ブルジョアの目的意識性と微妙に絡み合いつつ，社会民主主義などの修正主義，改良主義の目的意識性に収斂して行く。もっとも，国民国家の帝国主義的対立が，その過程を劇的に中断し，ファシズム国家における大衆運動の超保守化が現出した。ともかく，これらの経験からひきだされた生まの認識は，マルクスに端を発する生産一元的な歴史理解に止めを刺したといってよかろう。

にも拘わらず，マルクスの実践（行為）の原集合構造の認識に照らして，可能となった分業と支配の社会構造認識は，ウェーバーなどのようなすぐれた認識者により，方法的に鍛え直され，現代社会の認識に役立っている。それは，マルクスが念願した，価値の極みを地上的に実現する方向ではなく，仮説的検証により認識を無限に深めて行く方向であり，ここに「共産主義の妖怪」の最後の寝所がある。

〔1983年7月4日，アメリカ独立記念日早暁〕

（注）引用は，K. Marx u. F. Engels; Werke, Berlin, 1956～により行なった。なお，山之内靖「マルクス・エンゲルスの世界史像」（未来社）及び同「現代社会の歴史的位相—疎外論の再構成のために—」（日本評論社）を参照されたい。特に後者については，すでに本三田学会雑誌76巻2号に，また来たるべき5号に小生の批判的応答がのる予定である。本稿と比較検討していただきたい。

（経済学部教授）